

Title	<書評> 荒武達朗著 『近代満洲の開発と移民--渤海を渡った人びと』
Author(s)	江夏, 由樹
Citation	東洋史研究 (2010), 68(4): 689-697
Issue Date	2010-03
URL	https://doi.org/10.14989/178105
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

荒武達朗著

近代滿洲の開發と移民

——渤海を渡った人びと——

江夏 由 樹

I

近代の滿洲（中國東北地方）を考察の対象とした近年の研究の進展は著しい。日露戦争後の南滿洲鐵道の經營をめぐる諸問題、また、「滿洲國」の時代を中心としたこの地域の産業・經濟等の問題を論じた考察をはじめ、當時の日本の政治・外交・經濟・社會等の動きとの關係を明らかにしながら、様々な方面における滿洲史研究が發表されてきた。こうした研究が利用する史料・資料の多くは當時の日本人によって作成された日本語のものであり、廣い意味で、これらの研究は日本史研究の一翼としての性格を有していると言えよう。滿鐵、滿洲國等の諸機關・組織が残した膨大な史料・資料の存在が、こうした滿洲史研究を推進する原動力となった。他方、中國近代史研究の分野においても、近年、張作霖・張學良政權期の政治・經濟・社會等に關する研究などで、多くの成果が生み出されている。これらの研究は、前述の日本語の史料・資料等を積極的に利用しつつも、さらに、中國語（漢語）

で記された各種檔案類等の史料の分析に力を注ぎ、當時の中國側から見た滿洲の歴史を明らかにしようとしている。様々な制約はあるものの、近年、中國において檔案史料等の利用が可能となったことが、こうした研究の進展を促したと言える。興味深い點は、同じ「滿洲史」でありながら、これら兩者の研究の間には、その問題關心、また、この地域の歴史像にしばしば微妙な相違が存在することである。

日本語の史料・資料を主に利用した諸研究は、日本と滿洲との關わりが本格化した一九世紀末以降のこの地域の歴史を考察の対象とすることから、當然ながら、それ以前、つまり、清朝時代の滿洲の歴史に深く立ち入ることはない。そうした研究では、しばしば、かつての滿洲は、中國關内と異なり、八旗制という特別な統治機構のもとに置かれた、なお「未墾地」が廣く展開する「邊境」というイメージで捉えられていた。しかし、この地域を單純な「邊境」という概念で理解することは必ずしも正確でない。滿洲は清朝の故地であり、この地域をどのように治めるかということは、清朝にとっては重要な關心事であった。滿洲の近代史を理解するためには、どうしても、清朝の時代のこの地域の歴史とのつながりのなかで考察を進めていく必要がある。

本書の特長の一つは、右記のような研究上の要請に應え、清朝の時代とそれ以後の近代の滿洲の歴史像を、一つの文脈のもと、時代を貫くかたちで描こうとした點にある。具體的には、すでに清朝の早い時期から、山東半島から滿洲への移民が大規模に行われていたことに着目し、そうした移民の歴史を追うことで、近代の滿洲社會を長い時間軸のなかで理解しようとした。第二の特長

は、滿洲への移民の歴史を論じることにより、この地域の歴史を移民の送出地である華北社會との連關のなかで捉えたことである。考察の対象を特定の地域の内側のみに限定することなく、他地域との關係のなかで分析することから、しばしば、より廣い視野のなかで、新たな問題を見いだすことができる。本書は、近代滿洲の歴史を廣い地域的な擴がりのなかでとらえ、その歴史を中國史、アジア史全體のなかに位置づけようとした試みと言えよう。こうした本書の特長については、あらためて、後述することとし、まず、各章の内容を紹介したい。

II

本書は次の各章から構成されている。

序章

第I部 滿洲編

第一章 乾隆嘉慶年間滿洲の封禁と漢民族の移民

第二章 山東省地域社會の擴延——山東半島と遼東半島

第三章 一九世紀後半北滿洲の邊境經濟と漢民族の進出

第四章 一九二〇—三〇年代北滿洲をめぐる勞働力移動の變容

第五章 山東省における滿洲移民送出地の擴大

補論 近代滿洲における「山東老郷」の形成——僞りの出身地

第II部 華北編

第六章 移民送出地の農村經濟——一九〇〇—二〇年代山東半島

島

第七章 山東省の農村經濟・農家經營と滿洲移民

結論

主要參考文獻目録

あとがき

索引

中文提要

「序章」において、まず、著者は傳統的中國社會における移民の歴史を考察したこれまでの研究を概観する。そのうえで、本書の課題である一八世紀初期から二〇世紀半ばの中國華北、特に山東省と滿洲との間の移民現象を考察するためには、移民民を送出した側（山東省）と受容した側（滿洲）の社會的分析をそれぞれに行い、さらに、雙方の社會をつないだ社會的・經濟的・文化的紐帶を明らかにすることが必要であると説明する。

第I部は滿洲が考察の舞臺となる。第一章「乾隆嘉慶年間滿洲の封禁と漢民族の移民」は、「はじめに」において、これまでの滿洲地域史研究の成果とその問題点をまとめている。それによれば、近年、清朝初期、あるいは、清末以降を對象とする實證的な歴史研究の進展は著しいが、他方、康熙から嘉慶年間の時代にかけてのこの地域の歴史についてはなお解明されるべき点が多い。具體的には、この時期、どのように、山東省等からの移民によってこの地域の社會が形成されていったのか、その具體像を探る作業が中心の課題となる。この点について、著者は、戦前の稻葉岩吉、矢野仁一、周藤吉之らの研究が着目した「封禁政策」、つまり、滿洲への移民を禁止、あるいは、制限した清朝の政策をあらためて検討することが必要であると説明する。第一節「封禁政

策の初期―乾隆年間以前」は、『清實録』の記載を検討し、清初の空白期を経て、康熙年間半ば以降には關内から滿洲への移住民の流入が本格的に始まり、これに對し、清朝は旗人と民人の分斷、旗界と民界の設定等によって、これら移住民の統制を圖つたことを論じる。つまり、その後の「封禁政策」の基本姿勢をすでにこの時期に見いだすことができた。第二節「乾隆年間封禁政策の整備と滿洲移民」は、清朝發祥の地である滿洲に漢人が立ち入ることを禁止した「封禁政策」が、実際にはどのように運用されていたのかという問題を論じる。この政策は乾隆五年に施行されたと言われるが、著者は『清實録』、また、各種檔案史料の記述を検證し、「封禁政策」を嚴格に實施するとする「理想」「總論」は清朝皇帝、官僚らによって練り返し表明されていたものの、実際には、「人民生活の安寧」「被災民の救恤」という言葉に示される現実的な對應により、多くの人々が關内から滿洲に流入していったことを論じる。第三節「封禁政策の再調整」は、乾隆末年から嘉慶年間に至り、關内から滿洲への移民流入が擴大するなかで、「封禁政策」の嚴格な實施という原則と「被災民の救恤」「人民生活の安寧」という現實的對應の間を搖れ動いた清朝の政策を追う。そうしたなかで、清朝は「封禁」の内容を柳條邊牆の外側（邊外）への移民禁止・統制へと、その政策の重心を移していった。

第二章「山東省地域社會の擴延——山東半島と遼東半島」は、封禁政策のもとで滿洲と山東の兩社會の間を移動した人々の具體像、また、かれらの間に存在した社會關係の諸相を解明する。

「はじめに」で、まず、著者は山東社會にとつて、滿洲は穀物を供給し、雇用機會を提供する重要な地域であり、早い時期から、

兩地域が海路により密接に結びついていたことを説明する。第一節「滿洲經濟への内在化」は、『刑科題本』等の史料の記述を紹介するなかで、農業労働者として相對的に高い賃金で雇用された山東の人々が春先に滿洲に赴き、晩秋・初冬に故郷に歸還する姿を浮き彫りにする。第二節「移動する人々の實態」は、滿洲と山東の間を往來した船舶が朝鮮半島に漂着した際の取調記録（『備邊司謄錄』所收の「問情別單」）を考察し、山東省の登州府、萊州府等の人々は出稼ぎだけでなく、商賣、結婚等のためにも滿洲との往來を繰り返しており、比較的安價な船賃がそうした行き來を可能にしていたことを説明する。第三節「兩地域に擴大する血縁組織」は、山東省黃縣丁氏、黃縣戚氏、黃縣趙氏、東萊趙氏、萊陽姜氏等の族譜を考察するなかで、山東半島と滿洲にまたがって組織されていた宗族關係を確認し、そうした關係に根ざした人々の往來、つまり、渤海を隔てて形作られていた「隔海地域社會」の存在を強調する。第三節「吉林徐氏の履歷——定住への道程」は、民國期に吉林省長等を務めた徐鼎霖の生家であり、永吉（現吉林市）の名族である徐氏の『吉林永吉徐氏宗譜』の記載を手がかりに、元々は山東登州府黃縣に居住し、明代隆慶期に萊州府昌邑縣に移住した徐氏の一部が後に吉林に移住・定着し、地域の望族に上昇していった過程を描き出す。

第三章「一九世紀後半北滿洲の邊境經濟と漢民族の進出」は、「はじめに——吉林徐氏の北滿洲進出」において、前章でとりあげた吉林徐氏が有力な宗族として地域社會のなかで上昇していった歴史を、その族譜に記された通婚關係の擴大をみることから確認し、そのうえで、地方志等の記載から、徐氏との通婚相手は官

荒地の拂い下げを受けるなどの過程を経て、地域の大地主、商工業者としての地位を確立していった可能性を提示している。第一節「一九世紀後半北滿洲の變容」は、北滿洲の松嫩平原、三姓、琿春といった地域に移民の流入が始まったことは、これらの地域がブラゴベシチェンスク、ハバロフスク、ウラジオ・ポシエツト港等の都市との交易據點、食糧の供給地として成長したためであり、北滿洲における急速な農地・人口の擴大はロシアの極東進出と深く結びついていた可能性を論じる。第二節「ロシア極東の後背地としての北滿洲」では、露國大藏省『滿洲通志』、中國側の檔案史料等を利用して、ブラゴベシチェンスク、ハバロフスク、ウラジオ等の都市と北滿洲との間の貿易關係を具體的に考察し、すでに一九世紀末までに、北滿洲はロシア極東に穀物、蔬菜、酒、家畜、肉類などの食料品、日用品を供給する後背地としての役割を擔っており、その開發が急速に進行するなかで、大規模な移民の流入が見られたことを明らかにする。著者は北滿洲における開發の進展、そこでの地域エリート形成過程は南滿洲の場合とはかなり異なっていたことをここで強調している。

第四章「一九二〇―三〇年代北滿洲をめぐる労働力移動の變容」は、二〇世紀初頭の中東鐵道の開設が北滿洲の農業經濟、具體的にはこの時期に需要が急増した小麦・大豆等の生産、それに附隨した商業等の成長をもたらしたことで、そこでの雇用機會を求めて華北、南滿洲の地から大量の労働力が流入したことを論じている。また、そうした労働力の移動が必ずしも華北地域から滿洲へという圖式だけでは理解できないことを、北滿洲と南滿洲との間の、また、滿洲内部における農業部門と工鑛業部門との間の勞

働力移動の關係から分析している。第一節「北滿洲農業における労働力の吸収」では、滿洲國の『産調資料』、石田精一等の研究を利用して、この時期、農業部門における季節的な賃金變動が存在するなかで、華北、南滿洲から北滿洲に流入した農業労働者は「高賃金スポット」を求めて移動を繰り返していたこと、そこでは、「工夫市」という労働市場の存在が重要な役割を果たしていたことを論じる。第二節「一九二〇―三〇年代南滿洲における工業・鑛業部門の成長」では、『産調資料』『榎谷仙次郎日記』等の記録に依據しつつ、撫順炭坑の開發に代表されるような工鑛業の發展が見られるなかで、南滿洲においても労働力の確保が決して容易ではなかったことを明らかにする。その結果、北滿洲の農業部門と南滿洲の工鑛業部門との間には労働力の獲得をめぐる競争關係にあつたこと、それゆえ、華北から流入した、あるいは、南滿洲に居住した農民たちは有利な就業機會を求めて、兩部門の間を移動していたことを述べている。最後に、「小结」は、こうした農民の行動様式のなかに見いだすことのできる高い流動性を強調している。

第五章「山東省における滿洲移民送出处の擴大」は滿洲への移住者の出身地の分布とその時期的變遷を、(1)清朝中期から一九〇〇年代初頭まで、(2)一九〇〇年代初頭以降、という二つの時期に分けて考察している。前者の時期については、第二章でも用いた漂流民に對する取調記録等を考察し、一九世紀末以前においては、滿洲に流入した者の出身地は山東半島の登州府が最も多く、萊州府がそれに次いでいたことを明らかにする。後者の時期については、第三、四章でも考察した守田利遠『滿洲地誌』、

また、滿洲國國務院實業部が一九三〇年代に實施した調査の記録である「康徳元年度農村實態調査 戸別調査之部」「康徳三年度農村實態調査 戸別調査之部」、さらに、その後に行われた同様な調査の成果である「縣技士見習生農村實態調査報告書」に收められている「農家略歴表」を利用し、滿洲に移住してきた各農家の出身地をまとめた。この「農家略歴表」には、調査対象となった農家がいづらどこから移住してきたのかという問いへの答えが記されている。移住者の山東省における出身地については、①黒龍江省西部及び内蒙古、②黒龍江省中部、③黒龍江省東部、④吉林省中部及び西部、⑤吉林省東部、⑥東部蒙古、⑦遼寧省東部、⑧遼寧省西部及び熱河、⑨ロシア領アムール州、⑩ロシア領沿海州の場合についてそれぞれ類型化している。そうした考察の結果、一九〇〇年以降も、登州府、萊州府、青州府等の山東省東部、山東半島の出身者がおお滿洲への移住者の多数を占めていたものの、中東鐵道の建設を契機として、齊齊哈爾、哈爾濱などの大都市、黒龍江省東部等の邊境地帯には濟南府等の山東半島以外の地域からの移住民の数がかなりの割合を占め始めていたことを明らかにする。つまり、時代が下るにつれ、移民の送出地が擴大していったのである。「小結」において、著者は、一九四〇年代までを視野に入れるならば、滿洲への移民の送出地はさらに山東省南西部、河北省にまで擴がついていったこと、そうした移民現象の擴大は單なる人口壓の増大という説明では理解できず、その歴史を明らかにするためには、當時の華北農村經濟の實態を掘り下げて考察することが必要であると説いている。

補論「近代滿洲における『山東老郷』の形成——僞りの出身

地」では、滿洲移住民の一部には出身地を山東省と僞る「冒籍」という現象を見いだすことができること、その背景には、「同族的」な結合が希薄なこの地では、擬制的な「同郷關係」の果たす役割が重要であったことの可能性が論じられている。

第Ⅱ部「華北編」は、議論の舞臺を滿洲への移民送出地であった華北側に移す。第六章「移住民送出地の農村經濟——一九〇〇—二〇年代山東半島」は、一九世紀末から二〇世紀初めの山東省において進展した交通條件の大幅な改善、つまり、鐵道の敷設、汽船の普及、道路建設がこの地域からの滿洲移民をさらに大規模なものとし、そうした移民からの送金がこの地域の經濟に大きな變容をもたらしたことを論じる。第一節「山東省の開港と鐵道の敷設」は、一九世紀半ば以降、山東省では登州、芝罘の開港、その後の青島港の建設と膠濟鐵道の敷設等により交通條件が飛躍的に向上し、その結果、滿洲への移民送出地が従來の山東半島北岸地域にとどまるだけでなく、山東省の各地に擴大していったことを説明する。第二節「山東半島農村と滿洲移民」は、山東からの出稼ぎ者、かれらからの送金の増大は滿洲から山東社會への資金の流入をもたらし、そうした資金が山東の都市・農村における工業化、例えば、昌邑縣における繭細業、麥稈眞田の製造などの産業の成長を促し、この地域の經濟發展に大きな影響を與えたことを論じる。つまり、著者は、貧困が出稼ぎの原動力という視點のみで當時の滿洲移民を捉えることに對して、大きな疑問を呈している。第三節「ルーブル紙幣・圓系通貨の流通」は、滿洲への出稼ぎ者が手にしたルーブル紙幣等は、華北、滿洲に展開していた露清銀行のネットワークを通じて決済され、地域的な濃淡はある

ものの、貨幣として受容されていたこと、また、日本の圓系通貨についても同様であったことを論じる。つまり、金融の方面においても、山東省から満洲への出稼ぎを支える體制が確立していたことを、ここで確認している。

第七章「山東省の農村經濟・農家經營と滿洲移民」は、「はじめに」において、滿洲への出稼ぎを生み出した山東側の事情を明らかにするためには、そこに展開する各地域の農家經營と農村經濟の實態、人びとの生計のあり方を考察する必要があると強調する。第一節「民國期山東省の農家經營と農村經濟」では、一九一九年から一九四〇年に滿鐵、華北交通等がまとめた各種の農村實態調査の成果を分析する。具體的には、農村地帯である惠民縣孫家廟、鐵道沿線の泰安縣滂窪莊、濟南市近郊の南權府莊等の村落における農家經營の實態を分析し、それらの村落の農家は農業からは完全に離脱することなく、家計を維持するために、それぞれが置かれていた土地經營の實情、經濟環境等に應じて、「自家經營」「副業」「被傭勞動」という三つの要素を戦略的に採用していたこと、そのうえで、さらに現金収入の確保を目指す場合には滿洲への出稼ぎという選擇肢が存在したことを論じる。第二節「農家經營・農村經濟と移住現象」では、市場町の分布傾向、土地所有と經營様式、被傭勞動の意義といった問題から、山東半島部と華北平原部について比較し、「副業」「被傭勞動」の機會が少なかつた山東半島の農村部では、滿洲への出稼ぎが生計維持のための重要な選擇肢となっていたことを明らかにする。

「結論」は各章の内容をまとめ、最後に、本書の論じた滿洲移民の問題はたんに過去の歴史上の出來事ではないこと、つまり、

本格的な改革開放政策の進展のもと、今後も中國において大規模な労働力移動が豫想されるなかで、移住・移民の問題は古くて新しい研究課題であろうと結んでいる。

III

本書の内容、とりわけ、その特長を次の三點から論じてみたい。第一點は、本書が滿洲の歴史を長い時間軸のなかで、時期的には、清朝の早い時期から近代までをも対象にして考察を進めた、意欲的な歴史研究であるということである。公の文書に記された制度、政策のもとで、實際に展開していた過去の社會がどのような情況にあったのかを明らかにすることにはしばしば困難を伴う。清朝の時代の滿洲社會を研究する場合についても、この「制度」と「現實」との乖離という問題を避けて通ることはできない。具體的には、滿洲に對する「封禁政策」が、果たして、どの程度有効に機能していたのか、また、この政策のもとで、滿洲への移住民の流入・定着が實際にどのように進展していったのかという問題は、制度史の枠組みからだけではなかなか解明することができない。本書は、そうした困難を二つの方向から解決しようとした。第一に、著者は、手堅い史料考證の手法により、『清實錄』、各種檔案類を分析し、「封禁政策」の維持という「理想」「原則」と、その政策を嚴格には實施できない「現實」との間を揺れ動いた、清朝政府内部に存在した意見の衝突、それぞれの時點での對應のあり方を跡付け、そこから、滿洲に續々と流入していった移住民の實際の姿を描きだそうとした。とりわけ、『備邊司謄錄』所収の「問情別單」などの現場からの報告等を利用することにより、

滿洲と山東との間を實際に往來した人々の姿を生き生きと描き出している點などは高く評價できる。第二に、本書は、滿鐵、滿洲國等の手によつて實施された各種の調査報告書の内容を丹念に分析し、二〇世紀前半に現實に存在した滿洲社會の實態を明らかにし、さらに、そこから過去を照射する形で、清朝の時代以來のこの地域の社會變容の過程を論じた。この二つの方法が有機的に絡み合うことにより、清朝の時代から近代に至る滿洲社會の實際の姿が多面的に描き出されたと言えよう。これは、中國史研究を専門とする著者であるからこそなした手法と言える。

第二點は、本書が北滿洲の社會を主に分析の對象とすることにより、従來の見方とはかなり異なつた近代の滿洲史像を提示しようとしたことである。これまでの日本における滿洲史研究は、南滿洲を考察の對象とすることが多かった。これは滿洲の開發自體が、また、日本の滿洲への關わりが、まず、南の地域を中心に始まつたということにもよる。これに對し、本書は北滿洲の歴史を中心に取りあげた。本書の重要な問題提起の一つは、南滿洲の開發の延長線上に北滿洲の歴史が展開したわけではなく、ロシアの極東進出を契機として、シベリア諸都市の後背地として北滿洲の開發、移民の流入が進んだことを強調した點にある。その議論のなかに、さらに、次の二つの論點を見いだすことができよう。まず、第一に、移民の流入による開發のメカニズム、そこで社會變容の過程は、南滿洲と北滿洲では異なつた様相を見せたという指摘である。それゆえ、「滿洲」という地域を全體的にとらえる前に、まずは、南滿洲と北滿洲の社會のそれぞれを考察の對象とし、兩者の間の相違を浮き彫りにする作業が必要となつてくる。

そうした課題に應えるかたちで、著者は、移民の北滿洲への流入、その社會變容の過程について、例えば、吉林の有力宗族が地域エリートとして臺頭していく様子等を具體的に論じ、北滿洲社會の獨自な姿を描き出そうとしている。第二に、北滿洲における開發の進行が、ある場合には、南滿洲を飛び越える形で、この地域と山東省社會とを結びつけていったという指摘である。山東省から北滿洲への出稼ぎの實態、かれらの賃金の郷里への送金、つまり、北滿洲から山東へのルーブル紙幣等の流入などの考察により、本書は、北滿洲と山東社會との間の密接な關係を明らかにした。北滿洲への移民の問題を、山東省社會をも包み込んだ「隔海地域社會」の經濟活動という視點から考察したことは、本書の大きな貢獻である。

第三點は、本書が、山東から滿洲への移民について、「貧困」を動機にしたものとは必ずしもとらえていないことである。著者は、むしろ、滿洲における相対的な高賃金の存在、つまり、多くの山東省の人々は有利な就業機會を求めて滿洲に渡つていたことを強調し、そうした勞働力移動の季節性、また、その流動性を具體的に論證している。本書の第Ⅱ部は、實際に、山東半島北沿岸部、その内陸部、さらに華北平原部に展開した各地の農村・都市經濟について分析し、そこから、この地域が滿洲に移住民を送出したメカニズム、その時代による變遷過程を検證した。移民の歴史を貧困の問題からのみで説明できるのかという點は、歴史研究の各分野が關心を寄せるところである。近代の山東社會、そこで「貧困」の問題等については多様な捉えかたが可能であろうが、そうしたなかで、本書が滿洲移民の歴史を、「勞働市場」の問題

から論じたことは興味深い。

上記のような本書の研究成果を確認したうえで、そこでの議論に内包されているさらなる課題といったものを考えてみたい。

満洲の歴史を論じる際、北満洲と南満洲との間の関係をどのように捉えるかという問題は、政治史の分野でも興味深い課題となっている。清末から張作霖政權の時代にいたるまで、例えば、吉林省の政治の動きは奉天省の場合とはかなり異なっており、奉天省の政治権力と吉林省のそれとの間には強い対抗関係が存在していた。現在の満洲史研究の課題の一つは、東三省を構成した各省の政治、経済、社會の状況をそれぞれ明らかにし、そのうえで、どのように満洲全體の歴史像を構築していくかということにあると言えよう。その點で言えば、吉林の地域エリートについての本書の考察などは、この地域の政治、社會の問題を南満洲の場合と比較するうえで大變示唆に富むものである。また、本書が北満洲の農業部門における雇傭問題に焦點をあて、そのなかで、労働力の確保をめぐる南満洲と北満洲との間の競合関係を分析したことなども意味深い。さらに、満洲史全體を考えるならば、問題は北満洲と南満洲との關係だけにとどまらない。「満洲」という地域概念を廣く捉えるならば、放牧地域である東部内モンゴルの歴史についても考察が必要になる。例えば、清朝、張作霖政權、「滿洲國」政府にとって、モンゴル王公、蒙地等の扱いは實に厄介な事柄であった。満洲史とモンゴル問題は切り離して考えることはできないのである。著者の研究がさらに進んでいくなかで、満洲の西側に廣く展開していた蒙地の拂い下げ、そこへの漢族移住民の入植をめぐる問題等は、是非とも今後さらに取りあげて欲しい

テーマの一つである。本書を讀む中で、南満洲と北満洲、農耕地帯と放牧地帯との關係など、満洲史研究の取り組むべき課題がなお数多く残されていることを、改めて確認することができた。

近代の満洲は中國、ロシア、日本などの各勢力が複雑な關係を織りなした地域であり、その經濟は國境をこえて開放的に展開していた。この點は、著者の最も強調するところである。それゆえ、その研究には、しばしば、中國史、ロシア史、日本史、モンゴル史、朝鮮史等の専門家による連携した作業が必要となってくる。そうした作業のなかで、それぞれの「各國史」研究の分野ではなかなか気づくことがない、興味深い問題を見いだすことができるかもしれない。本書との關連で言えば、近年、ロシア史研究の領域においても、極東、北満洲の開発史に強い關心が寄せられている。また、本書は、漢族の労働移動の問題から、北満洲とロシア、華北地域との間の關係を分析したが、例えば、この問題については、朝鮮人・朝鮮族が満洲の開発で果たした役割、とりわけ、水田開發の問題などを考察の対象として含めることにより、より多彩な議論が可能となるであろう。そうであるならば、本書の議論は朝鮮史、日本史研究の分野に對しても貴重な問題提起となる。本書は中國史の分野での實證的な研究成果であるが、そこには、さらに、「各國史」の枠組みには必ずしも收まらない満洲史研究の必要性、可能性が提示されていると言えよう。

最後に、本書は考察の対象としていないが、「制度」「政策」と社會の「現實」という點に關して、一九〇七（光緒三三）年に東三省における軍政支配が民政へと移行したこの問題を指摘しておきたい。すでに、光緒初年以降においても様々な改革の動きが

展開していたが、日露戦争後、清朝はこの地に中國關内各省と同様に總督巡撫制を敷き、その後、辛亥革命にいたるまで、總督を務めた徐世昌、錫良、趙爾巽のもとで、様々な方面での内政改革が進められた。この東三省の内政改革は本書の主題である移住民社會の問題とも密接な関係にある。實際、徐世昌によって記された『東三省政略』では、荒地の開墾、その拂い下げについての記述が重要な部分を占めており、また、『錫良遺稿奏稿』にも關係する記述を見いだすことができる。清末の東三省内政改革は、辛亥革命後のこの地域の歴史の動きを大きく規定するという意味をもっていた。そこで、こうした清末の内政改革の内容が滿洲移住

民社會のどのような状況を反映したものであり、また、そこでの政策が當時の滿洲社會にどのような影響を與えていったのかという点を考察することは、本書の研究課題とも深く関わってくる。本書の第三章と第四章の内容を時期的に結びつけるものとして、著者がその研究關心に沿って、清末東三省における内政改革の歴史の意味を明らかにするならば、その貢献は近代東北地域史研究、あるいは、近代中國史研究全體にとっても大きなものとなるであろう。

二〇〇八年十二月 東京 汲古書院
A五判 四三四頁 一〇〇〇〇圓